
白の魔法使い

水鏡 清華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の魔法使い

【Nコード】

N7862W

【作者名】

水鏡 清華

【あらすじ】

日本の東京に存在する、王都魔法学園。

そこには各国から集められた優秀な魔法使いの卵が集まっている。だが、この学校は魔法使いを育成するにあたり、重要な秘密を隠していた。

000 『プロローグ』（前書き）

修正あり、かなり大幅に変わりました。

000 『プロローグ』

《魔法》というものは誰もが使えるものではない。使えるのはほんの一握りの人間だ。

それに、自分の意思で自由自在に魔法を扱えるようになるにはそれなりの時間と努力が必要になる………

《王都魔法学園》 おうとまほうがくえん

そこは、全国から魔法の使える子供を集め魔法を教え、立派な《魔法使い》を教育する場所。

俺、白崎はくしき 白夜はやくぜいはその学校に通うことになっていた。

俺の家は毎年優秀な魔法使い……特に風の魔法使いを輩出している名家なのだが、俺はなぜか幼少のころから雷の魔法だけは得意で、雷だけは大人の魔法使い顔負けの力を持っていた。

だが、基本的に雷の魔法はあまり周りからは好まれない。理由は簡単で、雷魔法が低性能だからだ。詠唱速度こそは一番だが、それ以外にいいところが無く、雷魔法は外れの魔法、というのがセオリーだ。

それでも俺は雷魔法が一番好きだ。

周りから何と言われようが、俺は雷魔法を使い続ける。

あの人との約束を果たすために。

000 『プロローグ』(後書き)

アドバイスよろしく願いします) ^ _ ^ (

001 『電車での出会い』

「隣の人、遅いな」

人で溢れかえるホームを横目で見ながら、腕の時計をチラリと見る。

11時58分

「出発まで後2分か……」

誰にも聞こえないほどの小さな声で囁きながら、俺の頭の中はあ
る一つの事でほぼ埋め尽くされていた。

これでやっとあの堅苦しい家から脱出できる！

俺の家は魔法の名家、というだけあって、魔法の教育はかなり厳
しかった。自由な時間などは1週間に1時間ほどしかなく、魔法だ
けをずっとやってきたのだ。でも、やっとそんな場所から抜け出し、
寮生活が始まる。

嬉しくない方がおかしいだろう。

「せ……セーフ！」

「ん？」

ふいに、ガタン、と隣に誰かが座った音がした。

やっと隣の人 came のか、ギリギリだな……。

などと思いつつ、どんな奴か気になって横を見ると……。

淡い水色のショートヘアの小柄な少女が息を切らせて、くっ
つと椅子に座り込んでいた。

顔をのぞいてみると、見た目通り幼い顔立ちで、髪の色とは対照
的に燃え盛るような赤い目をしていた。ここまで走ってきたのか、
息はかなり荒く、額には大粒の汗を大量に掻いている。

「……大丈夫か？」

余りに苦しそうにしていたので、ポケットに入っていたハンカチを差し出すと、少女は一瞬目を見開き、そして春の陽だまりのような笑顔で、

「ありがとう！」

と言った。

直後、電車がなんの前触れもなく出発し、外の景色が一気に開放的な場所になり、海だけで一面埋め尽くされていた。

「ねえねえ、君。名前、なんていうの？」

急に声をかけられ、少し驚きながら言葉を返した。

「あ……ああ、俺は白崎 白夜だ」

「へえ。あたしはメル、メル〓ジエミニ。よろしくね、白夜」

いきなり呼び捨てにされたのに、なぜか不快な感じがしなかったのを不思議に思いながらも差し出された手を握った。

「分かった。よろしくメル、って呼び捨てでいいか？」

「うん！ 逆に、ちゃんづけとか、さんづけはあたし嫌だしね」

俺は勢いで少女　メルと友達になっていた。

「あうう。おなか減った」

電車が出発してまだ10分くらいしかたつてないのに、お腹を押しさえながらメルは呟いた。

「昼飯、食ってないのか？」

「うん……朝も食べてないんだ」

「ま……まじか、それはきついな」

俺なら、もう倒れている自信がある。

「うん。おなか減った」

「ていうか、なんで食ってないんだ？」

「……えつとね、まあ簡単にいうとね、寝坊……かな」

小さく苦笑しながら可愛く首を横に傾け、舌を出した。

童顔でのその表情はかなりの破壊力で、俺を苦しめたのは言うまでもないだろう。

「ったく。しょうがないな。……はい、これ」

煩惱を振り払い、鞆の中から小腹がすいたときに食べようとしていた焼きそばパンを取り出し、投げるように渡す。

メルはそれを慌てながらキャッチすると、赤色の目をキラキラと光らせながら此方を見つめてきた。

「え？ くれるの？」

「食べないと、今にも倒れそうな顔してるからな」

「あ、ありがとお！」

お礼を言いながら即座にパンにかじりつく。

「はむっ！ もぐもぐもぐ」

……… たぶんメルは必死になって食ってるつもりなんだろうが、1口1口が小さいから全然なくならない。 ……… まだ半分しか食べられてないし。

「ふ〜、お腹いっぱい……ごちそう様っ」

「ってはやつ！」

食べること数十秒、まだ半分しか食べられていないのにお腹いっぱいって……… どんだけ胃が小さいんだよ！ と心の中でツッコミをいれてからメルに話しかける。

「そ……… sonだけでいいのから？」

「うんっ！ おいしかった、ありがとね」

メルは残った焼きそばパンをキッチンとラップに包んでから、俺に差し出す。

「いや、もうそれはやるよ」

「本当！ ありがとっ！ これで夕食代が浮いたよ〜」

嬉しそうに顔をほころばせるメルを見ながら、俺は思った。

夜、そんだけでいいのかよ！

「くー…すー…くー」

あ、寝た。おなかいっぱい眠たくなったのか？

「…ほんとに性格も見た目通りだな」

俺は小さく呟き、メルの寝顔を見る。その柔らかなその表情は、俺の眠気を誘い、俺もそのまま眠ってしまった。

001 『電車での出会い』（後書き）

ずっと電車のなかだった。アドバイスお願いします（<—>）

メルはハーフっていう設定で！ もうそれで乗り切る！

002 『到着までの時間』(前書き)

12/24日10時44分 修正完了。

002 『到着までの時間』

目が覚めると、空を照らしていた太陽は沈み、真っ暗になっていた。

あの学園まではあと、2時間くらいだな。

と、そこで俺が周りの人（特に男）から強烈な視線を浴びているのに気づく。

（な……なんでだ？）

とにかく、その視線から逃れようと顔を伏せた、すると、目に映ったのは俺の膝を枕にして寝ているメルメルの姿だった。

「おい！メル！」

俺は周りに迷惑をかけない程度の音量でメルを起こそうとするが……起きない。

いっそ、頬をつまんでやろうと考えたが、逆に周りから変な目で見られそうだった。

どうする？ どうしよう。

いや、俺も寝よう。

「ぐー……すー」

俺はもう一度深い眠りについた。

気づいたらもう後10分くらいで到着というところまで来てしまっていた。 どんだけ寝てんだよ、俺。
ていうか……。

「おーい！ メルー！」

こいつはいつまで寝てるんだ？ しかも俺の膝の上で……結構恥ずかしいんだけど。

たぶん電車が出てすぐに寝たから…… 10時間くらいぶつ通しで寝てるのか。

「……どんだけ寝るんだよ」
俺はあきれながら呟く。

すると、急にもぞもぞと動き出したメルは両腕を真上に伸ばしてから、「ふわああ」と欠伸をした。

「んあ、よくねたあ」

「ずいぶん寝てたな、もう到着するぞ。」

「へ？ もう！？ あたし、どれくらい寝てたの？」

「うーん、5時間くらい？」

「そ……そんなに寝てたんだ」

恥ずかしそうに少し頬を朱色に染めながら、俯くメル。
それを見ながら、なるべく周りに聞こえないように囁く。

「……でき、できれば膝から頭……どけてくれないか？」

「……へ？ ってああ!？」

やっと今置かれている状況に気付き、今度は耳まで真っ赤になったメルは慌てふためきながら、ガバツと体を起こした。

「え……えと、あの、その、ご、ごめんっ!」

慌てふためいて体を起こす。

「いや……いいよ別に。それと……着いたぞ」

「へ？」

「なにが？」と言わんばかりに首を傾げるメルに、苦笑しながら言った。

「だから、《王都魔法学園》に」

「あ！」

そこで、電車内に機械的なアナウンスの音が響いた。

『王都魔法学園に到着しました。生徒のみなさんはすぐに電車の外に出てください、繰り返します。王都魔法
繰り返される放送の中で、車内がざわつき始める。』

「さて、俺たちも行くか！」

「わわっ！」

俺は、メルの手を引っ張り電車の外、王都魔法学園への一步を踏み出した。

002 『到着までの時間』(後書き)

修正完了。

003 『学生寮』（前書き）

今回は訂正部分が多そうな気がします。
つたらご感想ください！

おかしなところがあ

俺たちは入学式が終わり2人で《学生寮》に向かっていた。

ちなみに、学生寮というのはこの王都魔法学園に通っている生徒が住む場所で、1部屋に2人住むことになっている。当然部屋は男女別だ。部屋には風呂、トイレ、エアコンもついていて設備もいい。飯は食堂で朝、昼、晩、全て時間が決まっている。

「なあ、メル」

「ん？ なに？」

メルが少し首をかしげながらこちらを向く。

「メルは学生寮のルームメイトどんな子がいい？」
話題がなかったから適当に話を振ってみた。

「ん〜、そうだな〜……あ！ あたしは寝起きのいい人かな？」
メルが苦笑いをする。

「なんで？」

「いや……だつてあたし、1度寝たらなかなか起きられないし」
すこし恥ずかしそうにメルはいう。

「ああ、たしかに」

俺は電車の中でのことを思い出して納得した。

「そういう白夜はどんな子がいいの？」

メルに聞かれ、俺はすこし考える。

「そうだな……俺は気軽に話ができるやつがいいかな部屋で暇な時

に相手してくれるような」

「ああ〜……なるほど。それも重要だね……。」「
そんなことを話しているうちに学生寮についていた。
ただ、学生寮と言ってもただのアパートのようなものでは無く都会
の高層ビルのようなものだった。」

俺たちは寮に入っすぐ玄関に貼り出されている《部屋割り表》を
見に行った。

「あたしはどんな子と同じ部屋になるのかな？」
メルがわくわくしながら聞いてくる。

「そうだな……メルと同じで寝起きの悪い子とか？」
「ええ！ それは困るよ！」
とメルが叫ぶと同時に表の前に到着。

「え〜と……俺の名前は……」

「お、あった。206号室か……。えっと相部屋の人は……」

「えっと……あたしの名前は……」

「あ、あった。206号室か……。それで、相部屋の人は……」

『……………』

「「は？」」

「なんで、俺はメルと一緒になんだ!？」

「それはあたしが聞きたいよ！ なんで白夜と一緒にの部屋なの!？」

『……………』

俺たちは少し無言で考えてから……………寮監の人に聞きに行くことにした。

「あの、すみません」

「しつれいします」

俺たちは、あいさつをして事務所？ のようなところに入った。寮にいる警備員さんによるとここに寮監がいるらしい。

「ん？ なんだい？」

と、奥から優しそうな顔のおじさんが出てくる。

「すみません、この寮監さんはいませんか？」

「ああ、私が寮監だよ」

とおじさん、もとい寮監が答える。

「あの…………少し聞きたいことがあるんですが」

「なにかあったのかい？」

寮監が首をかしげる。

「部屋割りのことなんですけど…………。なんで、男と女がおなじ部屋に…………」

「あ！ もしかして君たち、岩崎 白夜君とメル＝ジエミニちやんかい？」

「へ…………。あ、はいそうですけど」
と俺たちはうなずく。

「じめん！」

いきなり頭を下げる寮監。

「今年は入学者がいつもより多くて、君たちだけ、部屋がどうしても足りなかったんだ！ それでもう一緒に部屋にいれるしかなくて

……」

寮監は本当に申し訳なさそうにしているので俺はすかさずフォローを入れる。

「ああ。そういうことなら仕方ないですよ。寮監のせいじゃないです。な？」

「う……うん。それにあたしたち結構なかいんで、別に大丈夫ですよ！」

と、俺の振りにメルもあわててフォローを入れる。

「本当に同じ部屋でいいのかい？」

「はい！」

2人で綺麗にそろった返事をしてから、俺たちは206号室に歩きだした。

「ああ〜……疲れたあ！」

俺はベッドに寝転がりそう叫ぶ。

「そ〜だね〜」

と気の抜けた返事が隣のベッドから聞こえてくる。

「なあ？」

「なに〜」

「メルはこれでよかったのか？俺はメルだったら気軽に話せるし、正直嬉しいんだけど。」

「うん、別に大丈夫だよ……でも！白夜って寝起きいい？」

「ん？ああ、別に悪くはないと思うぞ。」

「じ……じゃあっ！学校の日はあたしを起こしてくれない？」

「ん、わかった」

「ありがとうっ！」

そういつて安心したのか、すぐにメルはベッドで寝てしまった。

「今は4時か……夕食の時間に起こしてやるかな」

呟きながら俺は部屋の整理を始めた。

003 『学生寮』(後書き)

次はやつと魔法を出していくと思います。

004 『最初の登校日』(前書き)

魔法はいりませんでしたっ！

すいません！

004 『最初の登校日』

「おーい！ メル！ 起きろ。」

朝、俺はメルを起こすのに奮闘していた。

「ん〜……むにゃ

「お・き・ろ〜！」

「ううん……」

……駄目だ。起きる気配がない。しょうがない、ここは一番手っ取り早く……

ぎゅっ！

俺はメルの頬つぺたをつねる。

「ふえっ！ 痛い！ 痛い！」

悲鳴をあげながらメルが体を起こす。

「お？ 起きたな。」

「なにをするの!？」

「なにつて……なかなか起きないから頬つぺたつまんだだけだ。」

「もうちよっと優しく起こしてよ!」

メルが反論する。

「だって耳元で大声だしても起きないんだぞ。後はあれくらいしか方法無いだろ。」

「ううう！ でもお！」

「はい、ぐちぐち言っていないでさっさと着替えるぞ。俺は洗面所で着替えてくるから着替え終わったら言えよ。」

「あ！ 待ってよ、まだ話は終わって……」

「なんだ？ 俺の着替えを見たいのか？」

俺は冗談っぽく笑う。

「な／＼／そんなこと！」

メルは顔を真っ赤にして抗議する。

「冗談だよ。」

そういつてから俺は洗面所へ向かった。

……………その後、俺はメルの機嫌を直すのに10分も使ってしまった。

「まさかクラスも同じとはな。
俺は苦笑する。」

「そうだね」
とメルは嬉しそうにしている。

クラスは朝の集会で発表され俺はメルと同じのB組だった。
クラスは、A B C D E F Gの7つでメルと一緒にいる確率は7分の1だ。ここまで一緒だと誰かが仕組んだ風にしか思えない。

まあ、クラスに1人でも友達がいてラッキーだったけど。

時計を見て俺はもうすぐSHRだシヨートホームルームということに気づき自分の席に着く。
すると、隣から黒髪で俺と同じくらいの身長身長の男子に話しかけられた。

「え〜と……たしか岩崎 白夜だよな。俺は筑波 大和っていうんだ。大和と呼んでくれ。よろしくな！」

「ん？ ああ。よろしくな。大和。俺のことは白夜って呼んでくれ。」

「おう！ 分かった。」

『キーンコーンカーンコーン』

大和の返事と同時にチャイムが鳴り、SHRが始まった。

004 『最初の登校日』 (後書き)

つぎは魔法の説明をします！

005 『魔法の説明』（前書き）

これって最初にする話だな……

005 『魔法の説明』

魔法

魔法には種類が5つ、火・水・風・地・雷がある。そして1つ1つに《魔法名まほうめい》というものが存在し、魔法使いは魔法名を叫ぶことによって魔法を使用できる。

火の魔法名はファーバイス

水の魔法名はエルター

風の魔法名はヴィンター

地の魔法名はテリアン

雷の魔法名はディセンダ

魔法使いはこの言葉を叫び、魔法を使用している。

だが、魔法名を叫べば誰でも魔法が使えるというわけではない。体内にはある一定の《魔力》が必要になる。魔力は誰でも持っているようなものではない。魔力を持っている人間は知つての通りほんの一握りだけだ。

それに魔法使いでも全ての魔法を使用することは出来ない。使用できる魔法は2つだけ、それは制限されているのではなく使うこと

ができないからだ。魔力には使える魔法と使えない魔法の適正があり最初から《火と水》とか《雷と地》などと使用できる魔法は決められている……………

これが、王都魔法学園での最初の授業の内容だ。

005 『魔法の説明』（後書き）

次こそ授業を！

006 『魔法の授業』(前書き)

やっと書けた……

なんか誤字がありそう……

俺たちは2時限目が終わり《魔法実習室》に向かって歩いていった。

魔法実習室というのは生徒が実際に魔法を使い体で魔法の使い方を覚えるための教室だ。だが、魔法を使うのはまだ魔法学校の《生徒》なので魔法が暴走することがよくあるから注意しなければいけない。

……ということを生徒が言っていた。

「魔法実習楽しみだね〜」

メルがこつちを向いて機嫌がよさそうに笑っている。

「まあ、普通の授業をするよりかは楽しいだろうけどな」

俺はふと思ったことを質問してみる。

「なあ、メル」

「ん？ なに？」

メルが首をかしげる。

「メルってなんの魔法使うんだ？」

「あたし？ あたしは水と風だよ。……白夜はなんの魔法使うの？」

「俺は風と雷だ」

「へえ、なら風の授業は一緒だね」

「あ、そうだな」

「お〜い！ 白夜〜！ 一緒に教室行こうぜ！」

大和が後ろから走ってくる。

「ってあれ？ その子白夜の彼女？」

「違う！」

大和の言葉を俺は全力で否定する。

「そうだよ！ あたしは白夜の彼女なんかじゃないよ！」
メルは顔を真っ赤にしながら手を横に振る。

……そのしぐさは正直とても可愛かった。

「ここが魔法実習室か……なんか思ってたより普通だな」

外から見た分にはちよつと大きめの体育館にしか見えない。

「うん。 あたしも、もうちよつと機械的な期待してたよ」

「そうだよな。なんかパツとしないよな」

だが、中に入ると俺たちは何も言えなくなった。

「なんだ……これ？」

そこは何もない真っ白な場所ただそれだけ、だがそれしかない。

「ここで、どうやって魔法の練習をするのかな？」

「さあ？ わかんねえなあ」

「まあ、授業が始まればわかるだろ、それまで座って待っていよう」
俺たちは適当な場所に腰を下ろし、授業が始まるのを待った。

授業開始のチャイムが鳴り先生が説明を始める。

「これから、実習授業を行う！ 知っていると思うが最初の内は魔法が操作できずに暴走してしまうことが多い。十分に気を付けるように」

「それでは授業を始める。……テリアン！」

その先生が魔法名を唱えると真っ白でなにもなかった場所が動きだし、なにかの形を作っていく。

「うわ、すっげ〜！」

大和が目を輝かせて変化していく様子を見つめている。

「テリアンってことは地の魔法だな」

「うん、というより凄いな地の魔法ってこんな風にも使えるんだ」

「ああ、しかも体育館1個分となるとあの先生の魔力半端ないな」
俺らみたいな生徒が同じことをやったって絶対にこんな広さを変化させるのは無理だ。せいぜい頑張っても自分の周りを少し変化させるくらいしかできない。

「おい！ 見るよ、白夜！ メルちゃん！」

大和が興奮した様子で指をさす。

その方向を見ると……

さっきまで何もなかった空間に、教室が5つ出来上がっていた。

そして全ての教室に魔法の属性が1つ書かれていた。

「あの中に入って魔法の練習ってことか……」

「な……中に入るのちょっと怖いね……あ、白夜！ 一緒に風の魔

法のとこ行こうよ!」

「ああ、分かった。一緒に行こう」

「ちよつと待て!」

大和が俺を引き留める。

「なんだよ?」

「なんだよ? じゃねえよ! 俺も一緒に行きたいんだよ!」

「…………? なら一緒に来いよ」

「俺の使える魔法は火と地なんだよ! 風は使えない!」

……見事に俺もメルも使えない魔法だな。水か雷があつたら考えてやったんだが。

「すまん、俺たち火と地は使えないんだ。授業が終わつたらまた会おう!」

「ばいばい」

俺たちは後ろから聞こえる大和の声を無視して風の教室に逃げるように走って行った。

006 『魔法の授業』(後書き)

誤字や文に不自然な点があれば感想お願いしますm()
m

007 『魔法特異体質』(前書き)

大幅変更あり

「風の魔法は放出リリースと飛行グライドの2種類に分かれます。放出は手から圧縮した風の力を出す魔法、飛行は空を飛ぶ魔法です。この2種類の魔法にも適性がありどちらが使えるかによつて……」

と、まだ先生の話は続く。

「なあ、メル」

そろそろ先生の話に飽きてきて俺は小声でメルに小声で話しかける。

「ん？ なに？」

メルもたぶん飽きてきていたのだろっあくびをしながらこつちを向く。

「いや、話長いなあって」

「うん、そうだね……はやく魔法の練習したいなあ」

「はい！ では魔法の練習をしていききたいと思います！」

お、ちょうどいいタイミングだな。

「この台にリンゴを置きます」

先生がそばの台を指す。

「このリンゴを……そうですね、5メートル離れたところから落としてください。これは放出、飛行どちらをやるにしてもできなければならぬことなので頑張ってください」

「今回は簡単だね。もうちょっと難しいやつがよかったなあ」
メルが残念そうにつぶやく。

「簡単でいいじゃないか」

「え〜なんで〜！ せっかく魔法の授業なんだから難しいの覚えた
い！」

メルがぶくーっと頬を膨らませる。

「ごねるなって、今はまだ入学したばかりだからしょうがないだろ
う」

「……まあいつか。……あ！ そうですね白夜って放出か飛行どっ
ちの魔法使うの？」

メルのいきなりな質問に少し戸惑いながらも

「俺は両方使えるんだ」

と答えた。

「え？ 両方？ 片方しか使えないよね」

やっぱりこの反応か。

「いや、両方使える……実は魔法特異体質なんだ、俺」

魔法特異体質というのは、魔法を使える人の中でもごく稀にしか
いない珍しい体質のことだ。

俺の場合は通常、片方の魔法……例でいうなら『放出』と『飛行』
のどちらかしか使えない。だが俺の能力があれば放出も飛行も使
用することができる。当然、雷でも両方使用可能だ。

「え！ ほんと？ 白夜も魔法特異体質なんだ」

「ああ」

……『も』？

「『も』ということはメルもそうなのか？」

「うん！」

「じゃあどんな能力かおし……」

「はい！ その2人しゃべってないでこっち来て！」

先生のせいで能力を聞き損ってしまった……

また後で聞くか。

「ああ……おなか減った」

自分たちの部屋に着いた瞬間にメルのおなががぐうぐうと鳴る。

「腹減つてもメルは全然食べないだろ」

「あたしだって食べるときは食べるよ！ 今日はお茶碗1杯分ご飯
たべる！」

……それは、多い方なのだろうか？

疑問に思いつつも俺は

「まあ、無理するなよ」

と、だけ言っておいた。

「く……苦しい」

夕食を食べ終えた俺たちは自分の部屋に向かって歩いていく。

「だから無理するなって言ったんだよ、俺は」

嘆息しながらメルに言う。

「だ……だって！ 今日はおなかとっつっても減ってたから食べられると思ったんだよ！」

ちなみに、今日メルが食べたものはお茶碗1杯のご飯と味噌汁を半分（もう半分は俺が飲んだ）

「……なあ、メルってなんでそんなに小食なんだ？」

「ふえ？ 小食？ あたし、結構食べる方じゃない？」

どうやら、本人には小食の自覚がないらしい。

俺たちがそんな話をしていると

「なあ、白夜あゝ」

と、唐突に後ろから声をかけられる。

誰かと思つて後ろを振り返ると、大和がジト目でこちらを睨みつけていた。

「ん？ なんだ？ 大和」

「お前らさあ、やっぱり付き合つてないの？」

大和がにやにや笑いながら聞いてくる。

「付き合つてない！」

こいつ……まだ言つてたのか。

「そつだよ！ 付き合っていないって言ってるじゃん！ ……う！」

「つて！ おい、大丈夫か！」

メルが大声をだして興奮したのか、吐きそうになっていたので急

いで背中をさする。

「……そういうところが付き合ってる風に見えんだよ！」

大和がキレ気味に叫ぶ。

「だから、違うって言うてるでし……うう！」

「おい！ 興奮するなって！ 大和、俺ら先に部屋戻っとく！」

俺はメルをおぶりながら駆け足で自分の部屋に戻った。

007 『魔法特異体質』（後書き）

誤字脱字があれば報告お願いします。

『過去の記憶』(前書き)

更新遅れてまことにすいません！

『過去の記憶』

メルside

「うあゝ。ひまゝ」

あたし、メル〓ジェミニは暇すぎて時間を持て余していた。
その理由は白夜にある。

今朝、朝ごはんを食べてから部屋を出ようとしたときに、

「ちょっと待て、メル。今日は学校休め」

「へ？　なんで？」

「いつもより微妙に顔色が悪い。昨日も体調崩したばっかなんだから今日は大事を取って休んどけ」

「え、いやでもあた　　」

「休んどけ」

「だからあ　　」

「休め」

「……はい」

というところがあったから。

心配してくれるのは嬉しいけどあたしが大丈夫って言ってるんだから別に行ってもいいじゃん！
今日は魔法模擬試合があったのに。

頭の中で愚痴りながらベッドの上をごろごろと寝転がる。

「……………眠たくなってきた」

昨日はぐっすり寝たのにまだ体がだるいなんて。本当にあたし具合悪いのかな？

「せっかく休みなんだしもう寝ちゃお」

勝手に納得してあたしは眠りについた。

「あれ？ 二二二二二二？」

気が付くとあたしはベッドの上ではなく、青々と茂る草原の上でぽつんと寝そべっていた。

「ここはどこだろう。」

そう思い、体を持ち上げる。

軽く体についた草を払ってから周りを見渡すと綺麗な赤色の髪の毛

をした小さな女の子が花を摘んでいるのが見えた。
ちよつと話をしてみようと女の子に向かって走り始めたその時。

あたしは膝から地面に崩れ落ちた。

頭の奥の方から黒いものがあふれ出るような感じ。

怖くて怖くて仕方がないような、頭の中で絶望が回っているような、
そんな感覚。

「ねえ、どうしたのおねーちゃん」

儚げで透き通った声を聞いた瞬間、背筋が凍るような悪寒が流れ、
立つことはおろか身体に力を入れることさえできなくなった。

まるで全身の感覚が《凍りついたように》。

「寒いのか？」

「い……や、やめ……て。さわ……触らないで！」

徐々に鈍っていく感覚を必死で抑えながら差し出された手から逃げ
出すように後ずさる。

「じゃあ、ムースがあつたためてあげるね……」
《爆砕アブレーションの加護》

地底から湧き出るようにして現れた《炎の川》は青々と茂っていた
草原を焼き尽くす勢いで燃え広がっていく。

「えへへ、ムースえらいでしょ。《メルおねえちゃん》ほめてほめ
て！」

その言葉を最後に、プツンと映像が途切れた。

『過去の記憶』（後書き）

次回からはもっと早く、長くしていきます。

週一更新になりました。

土曜日の8時です！

008 『魔法模擬試合』(前書き)

戦闘描写ってむずいっすねw

008 『魔法模擬試合』

「魔法模擬試合を行います。《トゥーラ魔防具》を装着してください」

昼休みが終わり、俺たち学生は魔法実習室に集まっていた。

因みに、先生が言っている魔法模擬試合というのは試合形式の1対1で魔法を出し合い、先に相手の魔法を3発受けた方の負け、という簡単な競技だ。

魔防具をつけていないと、最悪死ぬ可能性もあるので俺はいそいそと腕輪状のそれを身に着けた。

「では、ペアを組んでください」

「おい白夜！一緒にやろうぜ！」

大和は話が終わると同時に話しかけて来たので特にやる相手がいなかった俺は快く了承した。

相手の使用属性は土と火だ。土は操作めちやくちや難しいと評判なのでまだ入学したての大和は火だけしか使ってこないだろう。

「うっしや、ぜってえ負けねえぞ！」

「それはこっちのセリフだ！」

「では、戦闘……………」

身体が緊張で固まり、それを解ほくすように何度か深呼吸する。

こんな体験は何度かあった。一応名門の家だから兄ともよく手合わせをしていた、そして試合の前にはいつもこの心地のいいような

緊張感を味わったものだ……まあいつも負けてたけど。

もう一度、大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出して、俺は目を閉じた。魂をシフトさせるためのその掛け声は、いつになく強く、はっきりと聞こえた。

「開始！」

「先にやらせてもらうぞ！ 《放出》^{ヴァイスター}！」

試合が始まると同時に手を前方に突出し圧縮された風の弾丸を流れるように発射した。一つ一つは10センチにも満たない小さな弾だが複数あればある程度のダメージになる、しかもこの試合は威力ではなく命中度を競うもの。それなら数が多い方がいい。

風の弾丸は吸い寄せられるように大和に向かい、当たる直前で消滅した。

「《爆発》（ファアバイス）」

「は!?!」

俺は思わず声を上げ、目を疑った。

避けるなら考えられるが消す、というの^{フリスト}は聞いたことが無い。

魔法名からして火の魔法っぽいけど火は《熱切》^{フリスト}と《爆発》の二つ。

火の魔法ならどちらにも派手な爆発音が聞こえてくるはずだ。

だが、今はそんなことを考えている暇もない。次の魔法の詠唱を開始する。

「どんなトリックかは分からんがもう一回受けてみる！」

俺の言葉に慌てたのか大和が前方に体を身構えたのを見て口をにやりと吊り上げる。

「《落雷（ディセンド）》！」

「な！」

何処から出てきたのか大和の真上に現れた雷雲から白い閃光が迸った。これは俺が得意な魔法、落雷だ。

相手の真上に雷雲を生成し、稲妻を落とす魔法。威力は本物の雷には及ばないが（というか及んでしまうとこの部屋が潰れる）魔法が発動するまでのスピードは最速。大和は何も出来ぬままに雷を直に受けていた。

「痛つつう！ 騙しやがったな！」

「戦略だ、騙される方が悪い」

さらに口を歪め、意地汚く笑う。外から見れば完全に悪役だろう。俺の言葉が癪にに障ったのか此方を睨みつけながら魔法を詠唱し始めた。

「くっそ！ ならこっちも本気を出してやる！ これ見て腰を抜かすなよ！ 《爆発》！」
ファーバイス

詠唱が終わっても爆発は起きずに大和の《手》が炎に包まれた。

「な！？ お前も魔法特異体質か！」

「へえ、よく分かったな。俺の能力は自分の身体からならどこからでも魔法が出せるっていうものだ。ま、教えたところで勝つのは俺だけだな！」

大和が軽く地面を蹴るとポウツと足から炎が噴出し、それに驚く暇もなく顔面を殴られ、そして爆発した。

かなり痛かったのに血が出ていないことに感心しつつも素早く体勢を立て直し、呆れる様に言葉を漏らした。

「……その能力チートじゃないか？」

「ははっ！ やっぱりそう思うか」

自分の能力が褒められたことが嬉しいのか少し弾んだ声を上げているのを見ながら次の魔法を考える。

《落雷》と《放出》は使ってしまったから同じ魔法を出しても躲されるだろうな……仕方ない、俺も能力を使うか。

「だが……油断するなよ、魔法特異体質はお前だけじゃない！
《^{ウィンター}飛行》！」

「飛行！？ お前さっき放出を」

言葉を言い終える前に大和の背後に回り込み、油断していてから空きだった背中に照準を当てて魔法名を詠唱した。

「^{ウィンター}《放出》！」

俺は自分の周囲にピンポン玉程度の風の弾丸を出現させ、機関銃マシンガンの様に連続で撃ち放った。

流石にこれは避けられないだろう。そう思った瞬間大和の《背中》から炎が噴出し、風の弾丸をすべてかき消した。

「は？」

驚愕のあまり、空いてしまった口を閉じようともせず俺はただポカーンとしていた。

「言っただろ、体からならどこからでも出せるってよ」

「……チート過ぎるだろ」

思わず漏れてしまった言葉と同時に時間切れのホイッスルが鳴った。

「へー。分岐魔法をどっちも使える能力か。いいなあ、その能力」

学校帰りに寄ったスーパーでメルのお見舞いの品を買いながら大和は納得した……という表情をしながらしきりに頷いた。

「いや、大和の能力の方が良いだろ。全身から炎とかチート過ぎるぞ」

「確かに強いけどもあれ、普通の魔法より魔力の消費がでかいんだ

って……」

「そうなのか？ どれくらい違うんだ」

「普通の魔法の消費が10だとしたらこっちは50くらいかな」

「結構持つてかれるんだな、ってかそれなのにあれだけ魔法使えたってことは魔力多い方なのか？」

「いや、生憎魔力は普通くらい。おかげで今はすっからかん」

おどけたように言っているがよく顔を見してみると大和の顔には確かに疲労の色が出ていた。

「悪い、疲れてるのに買い物付き合わせちまって」

「いいっていいって。それより早く買って帰ろうぜお前の彼女が寂しいって泣いてるぞ〜」

「おい！ だから付き合っていないって言ってんだろっがっ！」

008 『魔法模擬試合』（後書き）

ぐっだぐっだになってしまったorz

009 『絶望の氷』（前書き）

夜桜先生。レビューありがとうございましたm——m

今回は恋愛っぽい描写に挑戦。

「おい。メル帰ったぞぉー」

俺はかさかさと音を立てる小さな袋を片手に一気に廊下を走り抜けると自室の扉を開け、同時に少し声を荒げて叫んだ。

「おい。帰ったぞー」

返事がない……寝てるのか、もしかしたら無理やり休ませたことをまだ拗ねているのかもしれない。少し躊躇ってから、ここに居てもしょうがないという結論になり、部屋に足を踏み入れた。

室内は以上に暗く、雰囲気まで淀んで感じた。いつもは風になびいて涼しげな印象があるカーテンは完全に締め切られ、電気もつけていない、その中にぽつんとメルがベッドの上に座っていた。

何やってんだ、と聞こうとして俺は途中で言葉を止めた。

震えていたのだ。両腕で膝を抱え、不安そうに泣く子供の様に。

「おい！メル、しっかりしろ！」

耳元で叫んでも、反応がない、ずっと虚ろな瞳のまま呪文のように何度も何度も同じ言葉を呟いている、《怖い》と。

暗闇に照らされた顔は、いつもの元気な表情は無く、少し風が吹いただけでどこかへ消えてしまうような、そんな儚さがあった。

肌は氷のように冷たく、もう死んでるんじゃないか、という考えさえ沸いてくる。

気付いた時には、その体を温める様に、俺はメルのを抱きしめた。

自分でもなんでこんなことをしたのかは分からない、普通なら先生を呼んできたほうが良かったかもしれない。

でも、その呼びに行く少しの時間で、《あの人の様に》消えてしまいそうで、不安になって、気がいたらメルのを抱きしめていた。

メルのを頭を無理やり自分の胸に埋めこませ、冷え切ったその身体に両腕を回し、出来るだけ肌を自分の体に密着させた。

絶望という氷を、少しずつ溶かしていくように。

メルside

怖い。

怖い怖い。

怖い怖い怖い。

あの子のことは何も知らない。

でも、知ってる。

頭では覚えていなくても。

心は覚えている。

なんで怖いかは分からない。

でも、

怖い。

無邪気に笑うあの子が。

狂った笑みをみせるあの子が。

怖い。

あたしは、あの場所を知っている。

青々と茂る草原。

そして、

あの炎の色も。

怖い。

もう、これ以上思い出したくない。

その時、深い闇の中を、一筋の光が差し込んだ気がした。

急に体がぼかぼかとあつたかくなつていくのを感じた。

いや、

体だけじゃない

心からあつたためてくれている。

とても、心地がいい。

このままで、いて欲しい。

ずっと、守ってほしい。

そのまま、どれだけ抱きしめていたかは分からない。

先程とは変わって規則正しい寝音を聞かせているのが聞こえ、俺はほっとしてメル顔を見た。

泣きつかれた幼子の様にぐっすりと眠っている。ずっとこのまま向き合つのは流石に恥ずかしいので、起こさないようにベッドに寝

かせようと思ったが、メル両腕ががっしりと俺の背中に回っているのに気づき、苦笑する。

「これ……どうしよう」

一人で呟いてから、玄関を開けっぱなしだったことを思い出し、どうやっていくかを悩んでいるところを不意に聞こえたガタン、という音に遮られクルリと後ろを振り向いた。

音の発生源の方向を振り向くと、柄にもなく顔を真っ赤にしている大和がこつちをがん見していた。

「どうした大和。何か用か？」

「……………お邪魔しました」

音速　　といっても過言ではないようなスピードで消え去った大和を「なんだったんだ？」の一言で軽く流しながら、小さく肩を落とす。

……………待て。

今の俺たちの格好をもう一度考えろ。

ベッドの上、部屋のカーテンを閉め切っている、そして、抱きしめあっている……………。

あ、普通にだめだ！

「大和！　ちよつと待て！　これには事情が！」

気が動転してつい大声を出してしまった俺は慌てて口をつぐんだ。

(ここで大声を出すのはヤバイ！)

この状況を大和に見られた時点でもうかなりヤバイが、今メルが

起きてしまったら大惨事になる。それだけは死守しなければいけない。

が、そんな俺の願いもむなしくメルは「ふあゝあ」と小さくあくびをすると、だらしが無い顔で俺を見つめ、そして固まった。

パチパチと2回ほど瞬きをしたかと思うと、耳まで顔を真っ赤に染め、プシューっ！ という音を立てながらまたコテンと倒れこんだ。

「まで、メルもう寝るな。まってくれ、言い訳をさせてくれええええええ！」

静かな部屋に俺の絶叫が木霊した。

009 『絶望の氷』（後書き）

アドバイス、お待ちしております。

010 『料理好き?』 (前書き)

はい、お待たせしました。

すみません、遅くなりました！

ひとつだけ、内容がかなり薄いです。続きの話みたいなのは次書くのでよろしく願います。

「うっ!」

ぼふん、と音を立てながら一切汚れが付いていないベッドに倒れこむ。

そのまま手を真上に振りかざし、ベッドに両手を叩きつけると同時に、そばにあった枕に顔を埋め込む。

「恥ずかしい!」

顔を埋めたままなので、少しぐもった声が誰もいない寮に響き渡った。

「なんであたし……あんなことになってたの……」

あたしことメル!! ジェミニは今、錯乱状態に陥っていた。今、と言うより昨日の夜からと言った方が正しいけど。

「抱きしめられてたなんて………恥ずかしい!」

本日何回目になるか分からない絶叫を木霊させてから、少しだけ顔を浮かかせ白夜が気を聞かせて開けて行ってくれた窓の外を見た。

今日はいつもより暖かく、太陽も自分の姿を主張するように輝いている。春の陽気を一気に吸い込み、高まっている気持ちを落ち着けるように深呼吸を繰り返す。

やっと落ち着いてきたので「ふう」と息を吐く。

さっきも言ったが、あたしは昨日からずっと落ち着けないでいる。なんでかを考えると、また思い出しそうだから考えないけど。

「よし! こんな時は気分転換だよ、気分転換」

ひとりでにそう呟き、何かない物か……とぐるりと周りを見渡す。

豪華な内装の部屋だけど、改めて見るとものはほとんど置いていなかった。

「むー。なんにもないなあ」

大きな部屋だから、何かあるだろうと探してみたけど、生活に必要な最低限の物以外本当に何にもなかった。

せめてテレビくらい欲しいなあ、と愚痴をこぼしつつ諦めずにもう一度キョロキョロとあたりを見渡す。

すると、隣にあるベッドの上に無造作に置かれている、真っ黒な鞆が目に入った。これは白夜の荷物が入っている鞆だったと思う。いつつもここからタオルとか出してたし。

誰もいないことは分かっているが、勝手に警戒しつつ無造作に置かれている『それ』に向かい、手を伸ばした。

「開けても……いいよね」

ゴクリと唾を呑み込んでから、チャックに手を掛ける。音を立てずにそつと開けたあたしは、目を疑った。

中に入っていたものは、フライパンや鍋などの調理器具だけだった。それも見たこともないようなものばかりで、両手を使っても持てないんじゃないかと思うほど大きな物もあった。

全部黒一色に統一しているのは白夜の趣味だと思うけど、こつも黒だけだとちよつと不気味。少し身を引いてから、もう一度鞆の中を覗き込む。

「うわぁ……黒ばっか……」

呆れながら声を出し、嘆息した。

「なんにもないじゃん……」

入っているのは結局調理道具だけで、面白そうな物は全く入っていなかった。着替えとかはどうしてるんだろう、とは思ったけどそれは別問題だと思う。

早く帰ってこないかなあ。

考えながら、ふかふかのベッドに転がった。

010 『料理好き?』 (後書き)

次回もちと更新が遅れる可能性があります。すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7862w/>

白の魔法使い

2012年1月6日16時23分発行